『ニーベルンゲンの歌』における クリエムヒルトの恋愛観

「鷹の夢」とジーフリトの登場

田中一嘉

0　『ニーベルンゲンの歌』は「クリエムヒルトの歌」か？

12世紀末から13世紀中葉にかけてのドイツ語文学界を席巻した『ニーベルンゲンの歌』(以下NLと記す)は、ロマン主義以降の研究史において多様な解釈がなされてきた。ここではその全てを網羅することはかなわないが、作品解釈をめぐっての見解は主に二つの大きな陣営に分けることができよう。ひとつは、NLを英雄たちの滅亡を物語った叙事詩であると解釈するものである。これに対して、NLを「クリエムヒルトの物語」として彼女の人生に力点を置く解釈の方向性がある(1)。この二通りの解釈の仕方を可能にしている背景には、この作品の「タイトル」そのものが大きく関係していると思われる。

この作品の写本が書かれていた当時、この作品に‚Nibelungenlied‘というタイトルが付されていたわけではないのである。14世紀の写本Dでは„daz ist das Bůch Chreimhilden(これはクレイムヒルトの本である)“(2)と銘打ってあった。また、いわゆる「アンブラス英雄本」(16世紀初頭)と呼ばれる写本dでは„Ditz Puech heysset Chrimhilt(この本はクリームヒルトと称す)“(3)というタイトルが記されていた。さらに、ニーベルンゲン研究の始まりともいうべき時点である1755年、ヘルマン・オーベライトがホーエンエムス伯爵の図書館で最初の写本(現在の写本C)を発見した時、彼は発見した写本に„Chriemhilden Rache, und die

Klage ; zwey Heldengedichte aus dem Schwäbischen Zeitpuncte（クリエムヒルトの復讐、そして哀歌；シュヴァーベン時代の二つの英雄詩）“(4)というタイトルを付して刊行したのであった。オーベライトが付したタイトルを見ると、彼はこの作品を「クリエムヒルトの復讐」かつ「英雄詩」であると理解していたことが窺える。そして、クリストフ・ハインリヒ・ミュラーが1782年„Der Nibelungen Liet, ein Rittergedicht aus dem XIII. oder XIV. Jahrhundert（ニーベルンゲンの歌、13もしくは14世紀の騎士詩）“というタイトルで『ニーベルンゲンの歌』の完本を出版した際に、初めて「ニーベルンゲン」というタイトルが用いられた。この結果、今日に至るまで『ニーベルンゲンの歌』というタイトルが定着したのである。以上のようにこの作品のタイトルの変遷を見ると、この作品のタイトルは「クリエムヒルトの本」から「ニーベルンゲンの本（歌）」へと変更されているといえる。このことは、ロマン主義時代以降のニーベルンゲン研究者（もしくは読者）たちの視線が、女性であるクリエムヒルトから男性である英雄たちへと移ったことの証左となり得るであろう(5)。

確かに、NLがブルグント族やフン族の勇士たちの滅亡を物語っていることは疑う余地がない。ただし、タイトルの変遷の歴史からも窺えるように、この作品が「クリエムヒルトの物語」であると言える可能性を否定していない。むしろこの作品に対して中世の人々が抱いた印象は「クリエムヒルトの物語」であったと言える。そもそもこの物語は、クリエムヒルトの誕生によって語り始められ、彼女の結婚と復讐という段階を経て、彼女の死によって幕を閉じるのである。ここにこそNLの真の姿が表れているのではないか。クリエムヒルトの人生がNLを貫く主題であるとすれば、彼女の人生とはいかなるものであったのかを読み解いていかなければならない。NLにおいてクリエムヒルトの誕生と共に真っ先に語られているのが本稿で採り上げる「鷹の夢」である。この場面がNLにとって重要な意味を持っているからこそ、つまりクリエムヒルトの人生において重大な意味を持っているからこそ、ニーベルンゲンの詩人はこの作品を「鷹の夢」の場面から語り始めたに違いないのである。

1　「鷹の夢」と ,*minne*‘

13　このような素晴らしい名声の中でクリエムヒルトが見た夢では、
彼女が飼っていた一羽の鷹、それは強く美しくそして勇猛な鷹で、
二羽の鷲が彼女のその鷹を爪で引き裂いたのであった。
その時彼女はこう思わざるを得なかった：
この世でこれほど彼女を悲しませることは起こりようがなかった。

14　この夢を彼女は母ウオテに語った。
しかしながら彼女(ウオテ)はその夢の意味をこの善良な人(クリエムヒルト)にとって
よきものとして示すことはできなかった：
「あなたが飼っていた鷹、この鷹は一人の高貴なる男性です。
神様が彼を加護してくださらなかったら、あなたは早々に彼を失わねばならないでしょう。」

15　「なぜわたしに男性のことなど言うのです、私の優しい母上様？
勇士の愛情なしで、そのようにして私はこれから生きていくつもりです。
そうして私に死が訪れるまで私は美しいままでいるつもりです。
私が男性の愛情によって災いをうけたりしないように。」

16　「まあそのようなことを声高に誓ったりするものではありません。」
と、そこで彼女の母が言った。
「この世であなたがいつも心から楽しんでいられるとしたら、
それは男性の愛情によるものですよ。あなたは素晴らしい女性になれるのですよ、
もし神があなたにひとりの真に優れた騎士を与えてくださったならね。」

17　「この話はもうやめにしましょう。」彼女が言った、「母上様。
多くの女性の場合ではっきりと明らかになっているではありませんか、
喜びは苦しみへと最後には至るものだと。
私はこの両方を遠ざけましょう、そうすればこれから私に悪いことが降りかかることはないでしょう。」

18　クリエムヒルトは心の中で愛を完全に拒絶しようと努めた。

以来この善き人(クリエムヒルト)は長きにわたって穏やかな日々を送ったのだ、
彼女が愛したいと思う男性を知ることなしに。
だがやがて彼女は晴れてひとりの勇猛なる勇士の妻となった。
19 彼こそはその鷹であった。その鷹を彼女が夢に見て、
その鷹を彼女の母が彼女に占ったのだ。彼女はなんと痛ましい復讐をしたことだろうか、
彼女の近しい親族に対して、彼を殺した者たちに対して！
ひとりの死によって多くの母親の子供たちが命を落としたのだ。

「鷹の夢」の場面はわずか7詩節と短い場面である。しかし、登場人物たちの独白の場面と同様に、「この問答形式の会話は、登場人物たちについての解釈と彼らの自己表現にとっての手掛かりとなる」(6)ことからも重要な場面である。ここで語られているのは彼女たちの恋愛観もしくは結婚観であり、彼女たちの女性としての人生と直接結びついている重要な事柄である。しかもこの場面で、クリエムヒルトとウオテはまったく正反対の見解をぶつけ合ってさえいるのである。

ここでまず、「鷹の夢」で彼女らが議論している男女間の恋愛もしくは結婚について考察する上で必要不可欠な語である ‚*minne*‘ に着目したい。中高ドイツ語の ‚*minne*‘ という名詞は、現代ドイツ語の ‚Liebe‘ に相当する広範な意味での「愛」(男女間の精神的愛；性愛；友愛；宗教的愛；恋愛 etc.) を意味している(7)。「鷹の夢」では、‚*minne*‘ は 15, 2 ; 15, 4 ; 16, 3 ; 18, 1 ; 18, 3(8) の五箇所で用いられている。NL における ‚*minne*‘ の用いられ方を考えると、ほとんどの場合、性愛を含む広義の「男女間の愛」を意味していると考えられ、これは「鷹の夢」で語られている ‚*minne*‘ も同様である。しかし、一言で「愛」と言ってもその内実はいかようにでも解釈でき、理解される(本稿で「愛」もしくは ‚*minne*‘ と括弧つきで記述しているのは、このような理由からである)。以上のことを踏まえ、「鷹の夢」の場面におけるクリエムヒルトとウオテの考える「愛」、もしくは彼女らが体現している「愛」の具体的な考察に入っていきたいと思う。

2　「鷹の夢」におけるウオテの女性観

ウオテの発言(16, 2-4)の中での「素晴らしい女性(*ein scœne wîp* 16, 3)」とはどのような女性なのか。ここでウオテが抱いている理想的な女性像の前提として、何よりもまず彼女自身の存在があろう。そこで彼女の人物像について考察してみたいと思う。彼女の人物像を端的に示しているのは祝宴の場面である。NL では数々の祝宴が催され、その度に宮廷の女性たちについての記述がされている。祝宴に際してウオテは、煌びやかで華やかな衣裳(この衣裳を作るのは女性の仕事であった)で着飾り、客人に対する恭しい挨拶、客人や使者への豪華な引出物の贈与、これらの全てを取り仕切る宮廷女性、女主人として描かれている[9]。ヨアヒム・ブムケが指摘しているように、宮廷祝典は当時の叙事文学において、宮廷女性の典型的な振る舞いが最もよく示されている場面であると同時に、「宮廷祝典は封建的統治形態と関連しているもの」[10]でもあった。つまり、ウオテは、華やかな宮廷生活を謳歌しているだけではなく、宮廷におけるある一定の権限をも行使しているのである。そして、ウオテ自身が宮廷社会において「心から楽しんでいられる」(16, 2)女性の典型であり「素晴らしい女性」の典型なのである。

また、「素晴らしい女性(*ein scœne wîp* 16, 3)」の ‚*sc*[*h*]*œne*' という語は、現代ドイツ語の ‚schön'「美しい」に相当する語であるが、この語が包含する意味はきわめて広い。中世の道徳観では「女性の内面的な高潔さは、肉体的な美しさの内にその姿を現す」[11]と言われるように、‚*sc*[*h*]*œne*' という語が指し示す意味は外面的な美しさのみならず、人物の内面性にまで及ぶ。さらに、この女性の美しさは、男性的な(騎士としての)肉体の強さおよび(王者としての)政治的な権威と同期すると考えることもできる[12]。この考えに従えば、「素晴らしい女性」に相応しい「真に優れた騎士([*eins*] *rehte guoten ritters lîp* 16, 4)」[13]とは、権勢を誇る有徳の男性であり、彼は戦いに身を委ねるだけの騎士というよりは、むしろ王者(としての騎士)なのである。それ故にウオテは、(クリエムヒルトと)対等の身分の男性、もしくはそれ以上の男性との結婚が望ましいと考えているのである。

そして、このウオテの発言で最も特徴的なことは、‚*minne*' の行為主体が男性にあると語っていることである。女性が「素晴らしい女性」として祝宴の際に豪華に

着飾ることができると同時に、限られた範囲ではあるがその政治的力を行使できるようになるには、「男性の愛情」が必要なのである。このことは、「男性の愛情によって(*von mannes minne* 16, 3)」ということばと、その男性を「神が与えて下さったら(*got gefüeget* 16, 4)」というウオテの台詞が物語っている。*‚minne‘* を体現する主体はあくまで男性であって、女性は *‚minne‘* においては客体的な存在でしかないということをウオテは(おそらく無意識的に)受け入れていると言えるだろう。しかもウオテは、この「男性の愛情」がどのような「愛」なのかを問うていないのである。*‚minne‘* は広範な意味での「愛」を意味していることは既に述べたが、ここでウオテが述べている「男性の愛情」が、女性の心へ向けられたものなのか、もしくは単に性愛的・肉欲的な欲望から彼女の身体に向けられたものなのか、あるいはその女性に付随する地位や財産に(むしろ地位や財産に付随する女性に、といったほうが良いかもしれないが)向けられたものなのかは明確ではない。また、ウオテの意図する「男性の愛情」が、女性を取り巻く要素(心、肉体、地位や財産など)をすべてひっくるめた一人の女性としての存在に向けられたものである、と考えることもできる。しかし、ウオテがクリエムヒルトに語ったことからだけでは、彼女が意図する「男性の愛情」がどのような「愛」なのかは読み取れない。ということは逆に、ウオテは、男性が女性に抱く「愛情」が如何なるものであってもかまわない、と考えているのではなかろうか。ウオテにとっての最大の関心事は、結婚によって女性が宮廷女性として「素晴らしい女性」になることであり、結婚の前提としての「男性の愛情」は、男性が結婚相手である女性に対して何らかの「愛情」を持ってさえすればよいのであって、その内実は如何なるものでも構わないのである。

また、結婚によって権勢を誇る男性の庇護の下に入るということを視野に入れるならば、女性が男性の *‚minne‘* の客体になるべく、主体的な振る舞いをすることは十分考えられうる。しかし、それは男性の *‚minne‘* を得るためだけの努力、卑屈な表現を用いれば「媚を売る」振る舞いであり、ウオテもそのような振る舞いをしろとは言っていない。さらに、現実の中世世界において、婚姻が王国間もしくはある一定の領土をもった諸侯間の政略結婚、軍事的同盟を暗に意味していた場合が多々あり、女性は「愛される」対象ではなく、それこそ単なる贈り物や道具のように扱われていたという背景がある。一般的に、結婚に臨む当事者たち、特に女性が望

んだ相手と結婚できるということは稀であった(14)。極論ではあるが、このような事情を鑑みれば、結婚する男性が花嫁に対して何らかの「愛情」を持っていることはむしろ幸せなことであり、ウオテにとってこのような男性であれば、よしんば政略結婚であってもよいのである。

このような男性中心社会の結婚観、女性を客体(むしろ贈り物)として捉える観念は中世文学の至るところで見られるものであり、NLにおいても見られる。このことを最も如実に物語っているのは、リュエデゲールの息女とギーゼルヘルが婚約する場面である。

そうなるにちがいないことに、誰が抗うことができるのか？
若い乙女を主人たちの許へ来るように招いた。
そうして彼にこのかわいらしい女性を与えることが約束された。　(1680, 1-3)
……
彼女がこの勇士を望むかどうか、それは彼女にとっていくらか困惑するものであった、
けれども彼女はこの立派な男性を受け入れようと考えた。
彼女はこの問いに恥らったのである、多くの乙女たちがそうであったように。
(1684, 2-4)

その後、父リュエデゲールと婿になったばかりのギーゼルヘルは相対する陣営の一員として戦う羽目になるのであるが、この婚姻はこのような悲劇を避けるために取り交わされたフン族側とブルグント族側の政略的なものであったとも考えられる。いずれにせよ、この婚約の場面でリュエデゲールの息女には選択の余地がないように思われる。しかし、ウオテの結婚観から見れば、ギーゼルヘルのような権勢を誇る男性とのこのような婚姻こそが宮廷に生きる女性が幸せに生きていくための方法であり、クリエムヒルトに語って勧めた生き方なのである。

3　「鷹の夢」におけるクリエムヒルトの恋愛観

そもそも夢を見て、その夢を占うことは当時の文学には数多く見られるモチーフであった。NL でも「鷹の夢」以外にも数箇所、クリエムヒルトおよびウオテが夢を見る場面がある(15)。このように、当時の人々は「夢に魅了されたり、熱心に夢を解読していた」(16)のであり、NL のクリエムヒルトやウオテのように中世の人々は夢占いの持つ予言的な意味を信じていた。クリエムヒルトは、「鷹の夢」の「鷹は一人の高貴なる男性」(14, 3)であるというウオテの夢占いを信じたからこそ、自分の身に「災い(*nôt* 15, 4)」が降りかからないようにと、「男性の愛情(*mannes minne* 15, 4)」を拒絶する。そして、クリエムヒルトは「愛」を拒絶することで「美しい(*scœn'* 15, 3)」ままでいることを望むのである。ここで目を引くのが前項で見たウオテが語る「素晴らしい女性(*ein scœne wîp* 16, 3)」との対照である。両者とも *,sc[h]œne'* という語を用いて、「結婚した女性の長所」と「結婚しない女性の長所」のという正反対の意味を語っている。では、クリエムヒルトが語っている「美しいままでいる」ということは何を意味しているのか。

まず考えられることは、肉体的な「美しさ」を保つこと、すなわち、死ぬまで「処女」を貫き通すこと、もしくは母になることを拒絶することであろう。当時の女性観、特にキリスト教的な女性観において、「処女性」は女性が守るべき徳性の中でも最高の位置を占めていたといえる。「処女性」は既婚者の「純潔」とも質的に違う特別の尊さがあった(17)。しかし、ここでクリエムヒルトにとって「処女であること」が宗教的に特別な意味を有しているのかどうかは疑わしい。確かに、NL においてクリエムヒルトはキリスト教徒として描かれてはいるが、彼女が例えばヴォルフラムのパルチヴァールのような敬虔なキリスト教徒であるとも言い難いのである(18)。

また、肉体的「処女性」を維持することが権力的な力を維持することであるとも考えられる。これはプリュンヒルトを例に挙げるとわかりやすい。彼女はイースラントの女王として君臨しており(326, 1)、三種の騎士競技によって彼女自身が闘い結婚相手を選別している(326, 4-327, 4)。プリュンヒルトが騎士競技で負けることは、彼女が勝者の妻となることであり、同時に女王としての地位を失うこと

をも意味している。その際、肉体的な処女を失うことは避けられない[19]。もちろんクリエムヒルトの場合は、プリュンヒルトのように「処女」を維持することによって、男性の力に頼らない自立した女王としての地位に君臨することはできない。そもそも彼女は一国を支配することができる立場にはいない。ブルグントは既にグンテルが支配しているのであり、その庇護の下に今のクリエムヒルトがいるからである。ただし、グンテルたち三人のブルグント王の庇護の下で享受している王女としての地位や権力は、いかなる他国の男性と結婚することによって得られるものよりも大きいと感じて、クリエムヒルトが結婚を拒絶しているとも考えることができる。クリエムヒルトが、今現在の宮廷生活を維持するためには結婚の必要性を感じていない、むしろ結婚することによって今よりも宮廷女性としての生活の質が悪くなるのであれば結婚などしたくない、と考えているということは十分考えられる。しかし、この場面で彼女は、「男性の愛情」を拒絶する根拠として、彼女の地位や権力について言及しているわけではないし、ましてやそれらを保とうとしている、とは言い難いのである。彼女が「男性の愛情」を拒絶する根拠はもっと別のところにある。

「美しさ」という語は、前段で述べたような人間の外面的な側面のみならず、人間の内面的な側面も射程としている。つまり、彼女の語る「美しさ」とは、肉体的に処女を維持することだけではなく、内面的な「心の美しさ」[20]を保つことも意味しているのである。ここにこそクリエムヒルトが「男性の愛情」を拒絶する根拠の一端が垣間見える。「心の美しさ」とは、心が悲しみによって曇らされることのない状態であると解釈できるし、愛情はもとより怒りや憎しみといった何らかの激しい感情によって心がかき乱されることのない状態であるとも解釈できる。換言すれば「心の美しさ」とは「心の平穏さ」である。「男性の愛情」は、彼女が「心の平穏さ」を保つためには大きな障害である。つまり彼女は、「男性の愛情」が彼女自身の心をかき乱し、その結果、彼女の身に「災い」をもたらすものであると考えている。それ故に「心の平穏さ」を保つために、単に一人の女性として「勇士の愛情なしで(*âne recken minne* 15, 2)」生きていくことを望んだのである。

さらに、「心の平穏」を保つためにクリエムヒルトが「愛」を拒絶したのは、彼女自身が語っているように、「喜びは苦しみへと最後には至るもの(*líebé mit leide ze*

jungest lônen kan 17, 3)」だからである。ここでクリエムヒルトが語っている *liebe*(17, 3)は単なる「喜び」[21]ではなく、*‚minne‘* があって初めて体現される「喜び」である。そしてクリエムヒルトは、過去の女性たちの悲劇を引き合いに出して(17, 2)、「愛」が「喜び」という肯定的な意味だけでなく、同時に「苦しみ」や「悲しみ」という否定的な意味さえも内包していることを語っている[22]。つまりクリエムヒルトは、*‚minne‘* によって得られる *‚liebe‘* が、最終的には *‚leit‘*「苦しみ、悲しみ」もしくは *‚nôt‘*「災い」を導くと考えており、恋愛に対して悲観的な姿勢を見せているのである。

‚leit‘ もしくは *‚nôt‘* という語に集約されているようにクリエムヒルトの恋愛観は悲観的なものではあるが、ここにこそ彼女の思い描いている「愛」が明確に現れている。*‚leit‘* は *‚liebe‘* と対を成しているように個人的感情の領域にとどまるものである。つまり、彼女が意図する *‚leit‘* が、精神的な「苦しみ、悲しみ」であることに何ら疑う余地はない。これに対して、*‚nôt‘* が意味する範囲は、精神的な苦悩や絶望だけではなく、物質(経済)的もしくは社会的な損失などによって被る不自由や困窮という広い領域にまでおよぶものでもある[23]。ここで、クリエムヒルトにとっての *‚nôt‘* が何を意味しているのかを見るために、「鷹の夢」の最初の場面に立ち戻ってみたいと思う。それは、彼女が飼っていた一羽の鷹が庭の鷲に引き裂かれた場面である(13, 2-3)。鷹を「飼う(*züge* 13, 2 ; *ziuh*[*es*]*t* 14, 3)」ということは男性を「愛する」ことを暗示したものであり、クリエムヒルトにとっての *‚nôt‘*(15, 4)とは、愛情を込めて育てていた鷹が殺されたこと、つまり、将来夫となるであろう男性の死であり、「この世でこれほど彼女を悲しませることが起こりようがない」(13, 4)ほど辛いことなのである。たとえ夢の中であっても、この鷹を失ったことによる悲しみの大きさから、彼女は愛情深い女性であることが読みとれる。ここでクリエムヒルトが語る *‚nôt‘* とは、単なる喪失による *‚nôt‘*「困窮」ではなく、むしろ彼女自身が積極的に愛している対象を失うことによって被った精神的な *‚nôt‘*「苦悩、絶望」である。それ故にクリエムヒルトが意図している「愛」とは、男性に付随する地位、権力や財産を重視しているのではなく、男女間の感情的・精神的な営為としての「愛」であり、しかも彼女自身からの能動的な「心からの愛」[24]である。

そしてクリエムヒルトは、彼女自身の「愛」ゆえの苦痛(*nôt* であり *leit*)を回避すべく、「愛したい(*minnen wolde* 18, 3)」という能動的な態度をも含めた「愛を完全に拒絶しようと努めた」(18, 1)のである。たとえこの夢自体が「まだ見知らぬ騎士的で英雄的な男性に対する彼女の覚醒している愛」を暗示し、「彼女自身が愛に焦がれている少女」であってもである[25]。つまり、クリエムヒルトの拒絶という態度は、彼女が「愛に焦がれている」にもかかわらず、「愛する」ことの先には暗い未来(*nôt* であり *leit*)があるのだという悲観的な恋愛観に立脚しているのである。このような恋愛に対する悲観的な見解によってクリエムヒルトが拒絶という態度をとったことに対して、イェンソンは、その根拠をクリエムヒルトの年齢に求めている。イェンソンは、この時点の「クリエムヒルトはおそらく(ジーフリトとの結婚の2年もしくは3年前)思春期の初期の頃であり、その時期ではまだ愛(Liebe)や性についての考えが彼女の中でまったく目覚めていなかった」[26]と論じている。それ故に彼女は、無思慮で盲目的に「愛」を拒絶しているだけなのだと。しかしクリエムヒルトは、ただ盲目的に「愛」に対して恐怖心を抱いているのではなく、恋愛に対して十分に思慮した結果、「喜びは苦しみへと最後には至るもの」(17, 3)だと答えたのである。「多くの女性の場合ではっきりと明らかになっているではありませんか」(17, 2)と付け加えていることからも、彼女が「愛」についての分別がついていることが窺えるのであり、彼女は「愛」について十分に思慮した結果、拒絶という態度を取ったのである。ましてや彼女は、思春期に見られる親への反抗心といったように、理由もなくただ感情的に母親に反発しているわけでもない。したがって、クリエムヒルトは彼女の年齢的な若さから「ませた(altklug[er])」[27]拒絶の決意をしたのではないし、クリエムヒルトの性格自体が「未熟でまったく判断力の欠けた(unerfahren und alles andere als urteilssicher)」[28]とは言い難いのである。

さらに、この拒絶の態度は、クリエムヒルトとウオテの ‚*minne*' をめぐる見解の間に大きな隔たりがあることをはっきりと示している。クリエムヒルトは ‚*minne*' に対して、必然的に ‚*leit*' もしくは ‚*nôt*' をもたらすものであるという悲観的見解を見せている。一方のウオテは、男性の ‚*minne*' は「素晴らしい女性」になるためのもの、という楽観的ともいえる見解を述べている。また、ウオテにとっ

て ‚*minne*' の主体は基本的には男性であって、女性は終始客体的な存在でしかない。仮に、権勢を誇る王者との結婚において、女性がクリエムヒルトの意図するような心的な「愛」を抱くことができたとしても、そして男性が(如何なる愛情によってでも)女性を「愛する」ことがあったとしても、ウオテにとってそれは単なる幸運に過ぎない。これに対してクリエムヒルトが意図している「愛」は、女性自身が能動的に体現するもの(*minnen* するもの)であり、しかも心から発せられるものであることが大前提となっている。それ故に、クリエムヒルトにとって、ウオテが意図するような対等な身分意識の上に成り立つ社会的な結婚関係、つまり男性に付随する地位や権力といったものは二の次も同然である。何よりもまず、彼女にとっての恋愛とは、彼女自身からの心的な「愛」があってこそのものなのである。

4　ジーフリトの登場、クリエムヒルトの転換期

「たとえどんなに多くの求婚者たちが彼女の愛(*minne*)を求めても」(46, 1)、「愛」を拒絶するというクリエムヒルトの決意は長い間揺るがなかった(18, 1-3 ; 46, 1-3)。と同時に、「鷹の夢」に現れた鷹は、「まだ見知らぬ人」(46, 4)でもあった。しかし、そのすぐ後で詩人は、かの鷹とジーフリトを結びつけ、さらにこのジーフリトとクリエムヒルトをも結び付けているのである。

だがやがて彼女は晴れてひとりの勇猛なる勇士の妻となった。
彼こそはその鷹であった。その鷹を彼女が夢に見て、
その鷹を彼女の母が彼女に占ったのだ。……　(18, 4-19, 2)

そののちに高貴なるクリエムヒルトは勇猛なジーフリトの妻となった。(47, 4)

「愛」を拒絶したクリエムヒルトの心情にとって、ジーフリトの登場は大きな転換点であるといえる。なぜなら、ジーフリトがヴォルムスの宮廷に現れてからというもの、クリエムヒルト(詩人も)は、「鷹の夢」で見た暗い未来と「拒絶」の決意について思慮し言及することがまったくなくなってしまっているからである。それだ

けでなく、クリエムヒルトは「愛」を拒絶するどころか、むしろ彼女自身もジーフリトに好意を寄せ、彼を積極的に心から「愛していく」のである[29]。ここでは何よりも、彼女自身の「愛」が、彼女自身の拒絶の意志を凌駕したことに大きな意味がある。

確かに彼らは、王子と王女という属性を伴っているが、彼らは互いに、王女としての、あるいは王者としての十分な権勢を有しているか否かの「判断」を下した[30]から結ばれたのではない。彼らの関係は、むしろクリエムヒルトが前提とした心的な「愛」に即したものであり[31]、彼らを結びつけたものは、地位や名誉、財産といったものではなく、彼らの心そのものなのである。そして、彼らは相思相愛であった。彼らの関係は一方通行のようなものではなく、彼らは「愛する」ことと「愛される」ことを同時に経験したのである。だからこそ、クリエムヒルトのこの転換の意義は大きい。なぜなら、クリエムヒルト自身の「愛」と、ジーフリトとの相思相愛によって育まれた彼女の大きな *‚liebe‘* は、「鷹の夢」で自らが語った *‚leit‘*（もしくは *‚nôt‘*）という暗い影をも凌駕してしまっているからである。つまりこの転換は、心的な能動性が恋愛をする両者に備わった時、「愛」の力はクリエムヒルト自身でさえ計り知れないほど大きなものになることを意味している。

さらにここで、この転換がこの物語にどれほど大きな影響を及ぼしているのかが見えてくる。人間が心から「愛し」、「愛される」ことがどれほどの力を秘めているのかが、物語の後半において「復讐」をテーマとして語られているのである。ジーフリトの死によって被ったクリエムヒルトの *‚leit‘* もしくは *‚nôt‘* は、もはや彼女の内にのみとどまるものではなくなったのである。彼女の「愛」が強ければ強いほど、彼女の「苦しみ、悲しみ」も大きいのであり、より一層「復讐」への発展が明瞭になる。そして、「鷹の夢」でクリエムヒルトが語った「喜びは苦しみへと最後には至る」(17, 3) という悲劇は、物語の結末において再び訪れる。

非常に大きな栄華はここに死を迎えたのであった。
すべての人々は苦悩と災い(*nôt*)を被った。
[エッツェル]王の祝宴は悲しみ(*leide*)とともに終わりを告げた、
いつも喜び(*liebe*)は苦しみ(*leide*)を最後にはもたらすものだから。　(2378)
……

ここでこの物語は終わりを告げる：これがニーベルンゲンの災い(*nôt*)である。

(2379, 4)

つまり、*‚liebe‘* と *‚leit‘* という悲劇がNL全体を支配しているのであり、しかもこの最終的な悲劇は、すべてクリエムヒルトの体現した「愛」による *‚liebe‘* と *‚leit‘* が引き起こしたものである。さすがのクリエムヒルトもこれほどの悲劇が訪れるとは予想だにしていなかったであろう。だからこそ、ジーフリトのみならず、彼女自身がジーフリトを「愛した」ことの重大さ、彼女の「愛」という心的営為に秘められた力の強大さが際立つのである。このように、「愛」という心的営為がクリエムヒルトの人生全体に大きな影響を及ぼしていることは間違いない。クリエムヒルトの「愛」は、「愛」における男女の相互性と、女性の能動的な姿勢という二つの大きな意義を有している。そして、この二つが揃ったとき、計り知れないほどの「喜び」と共に、果てしなく深い「苦しみ、悲しみ」が襲ってくるのである。それ故に「クリエムヒルトの愛」をこの作品を貫くテーマと見做すことができるであり、NLは単なる「クリエムヒルトの物語」ではなく、クリエムヒルトの「愛の物語」であるといえる。

使用テクスト

Das Nibelungenlied. Zweisprachig. Herausgegeben und übertragen von Helmut de Boor. Köln(Parkland Verlag)2003.

註

(1) 諸研究者間のこの相違の根底には、NLを「叙事詩(Epos)」とみなすか、あるいは「物語(Roman)」とみなすかという文学ジャンルそのものに対する判断の違いが見られる。ケルナーは、NLのクリームヒルト像は「詩人の最も強い人間像的な業績」が描写されているとみなし、NLを「クリームヒルトの成長の物語」としている(Vgl. Josef Körner : Das Nibelungenlied. Aus Natur und Geisteswelt Bd. 591, Leipzig u. Ber-

lin 1921, S. 83 u. 88.)。ナーゲルはこの作品をクリームヒルトの伝記的な物語と解釈し、アームストロングも同様の見解に立っている(Vgl. Bert Nagel : Das Nibelungenlied. Stoff-Form-Ethos. Frankfurt am Main 1965, S. 135 ; Ders. : Widersprüche im Nibelungenlied (1954). In : Nibelungenlied und Kudrun. Hrsg. von Heinz Rupp, Wege der Forschung Bd. 54. Darmstadt 1976, S. 367-431, hier S. 370 ; Marianne Wahl Armstrong : Rolle und Charakter. Studien zur Menschendarstellung im Nibelungenlied. Göppingen (Kümmerle Verlag) 1979, S. 316)。これに対してフリードリヒ・ノイマンは、NL は「物語」ではなく、伝説に基礎をおく「叙事詩」であると論じ、イーレンブルク、ゲーラーらはこの作品をクリームヒルトの伝記などではなく、ブルグントの「年代記」であるとしている(Vgl. Friedrich Neumann : Das Nibelungenlied in seiner Zeit. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1967, S. 179f ; Karl Heinz Ihlenburg : Das Nibelungenlied. Problem und Gehalt. Berlin (Akademie Verlag) 1969, S. 94 ; Peter Göhler : Das Nibelungenlied. Erzählweise, Figuren, Weltanschauung, literaturgeschichtliches Umfeld. Berlin (Akademie Verlag) 1989, S. 117)。さらにハイメス及びハウクは、クリームヒルトの存在はこの叙事詩において「二次的な機能」にすぎないとして、彼女を NL の中心人物と見做すことに対して消極的な見解を示している(Vgl. Edwerd R. Haymes : Das Nibelungenlied. Geschichte und Interpretation. München (Wilhelm Fink Verlag) 1999, S. 117 ; Walter Haug : Montage und Individualität im Nibelungenlied. In : Nibelungenlied und Klage. Sage und Geschichte, Struktur und Gattung. Passauer Nibelungengespräche 1985. Hrsg. von Fritz Peter Knapp. Heidelberg (Carl Winter Universitätsverlag) 1987, S. 277-293)。

(2) Werner Schröder : Nibelungenlied-Studien. Stuttgart (J. B. Metzler) 1968, S. 48. また、NL の写本は現在 30 数本確認されており、大文字(A, B, C, …)は羊皮紙本を、小文字(a, b, c, …)は紙本を表している(Vgl. Karl Lachmann : Der Nibelungen Noth und die Klage. 6. Aufgabe. Berlin 1960, Vorrede)。

(3) Karl Barstch : Der Nibelunge Nôt I. Hildesheim (Georg Olms Verlag) 1966. S. XIII.

(4) Werner Hoffmann : Das Nibelungenlied. 5., überarbeitete und erweiterte Auflage des Bandes Nibelungenlied von G. Weber und W. Hoffmann. Stuttgart (J. B. Metzler) 1982, S. 2.

(5) Vgl. Maren Jönsson : ‚Ob ich ein ritter wære' Genderentwürfe und genderre-

latierte Erzählstrategien im Nibelungenlied. Stockholm (Uppsala University) 2001, S. 13f.

(6) Maren Jönsson : a. a. O., S. 30.

(7) Vgl. Mittelhochdeutsches Handwörterbuch von Matthias Lexer. Zugleich als Supplement und alphabetischer Index zum Mittelhochdeutschen Wörterbuche von Benecke-Müller-Zarncke. 3 Bde. Stuttgart (S. Hirzel) 1992 ; Mittelhochdeutsches Wörterbuch. Mit Benutzung des Nachlasses von Georg Friedrich Benecke ausgearbeitet von Wilhelm Müller und Friedrich Zarncke. 4 Bde. u. Indexbd. Stuttgart (S. Hirzel) 1990 ; Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. Leipzig (S. Hirzel) 1885. 及び、中村由加利：liebe と minne について[学習院大学『ドイツ文学語学研究』第1号、1977、35～47頁]参照。

(8) 18, 3 では、動詞 ‚*minnen*' の形で用いられている。

(9) 263f. ; 345 ; 581 ; 589. NL ではウオテの他にも、ジーフリトの母ジゲリント、リュエデゲールの妻ゴテリントが同様に典型的な宮廷女性の描き方をされている。

(10) Joachim Bumke : Höfische Kultur. Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter. Bd. 1. München (dtv) 1986, S. 282f.

(11) Vgl. Joachim Bumke : a. a. O., Bd. 2, S. 452 ; Otfrid Ehrisman : Ehre und Mut. Âventiure und Minne. Höfische Wortgeschichten aus dem Mittelalter. München (C. H. Beck) 1995, S. 189-194. 中世の宮廷文学では、‚*schœne*' と ‚*guot*' は対応するものとして描かれることが多い。「鷹の夢」でも、クリエムヒルトが「善良な人(diu [der] guote[n] 14, 2)」、「善き人(diu vil guote 18, 2)」として語られている。また、頻度は少ないが NL において、男性(特にジーフリト)に対しても ‚*sc*[*h*]*œne*' という形容を用いている場合がある(「鷹の夢」でも直接ジーフリトを指しているわけではないが、鷹の形容に ‚*scœn*'(13, 2)が用いられている)。

(12) Vgl. Thomas Grenzler : Erotisierte Politik — politisierte Erotik? Göppingen (Kümmerle Verlag) 1992, S. 168ff. ; Maren Jönsson : a. a. O., S. 55.

(13) 注 11 参照。

(14) 当時の女性と「結婚」をめぐる問題についての資料として主に以下の文献を参照した ; Sculamit Shahar : Die Frau im Mittelalter. Übersetzt von Ruth Achlama. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1983, S. 76-163 ; Joachim Bumke : a. a. O., Bd. 2, S. 534ff ; エーディト・エンネン著(阿部謹也・泉眞樹子訳)：西洋中世の女たち(人文書院)1992、45～73頁および155～189頁；G・デュビィ／M・ペロー監修

(杉村和子・志賀亮一監訳)：女の歴史II　中世1　クリスティアーヌ・クラピシュ＝ズュベール編(藤原書店)1994、351頁以下。

(15) 921f ; 924 ; 1393, 2-3 ; 1509.

(16) ジャック・ル・ゴフ編(鎌田博夫訳)：中世の人間　ヨーロッパ人の精神構造と創造力(法政大学出版局)1999、39頁。

(17)「処女性」については、注14の典拠を参照した。

(18) クリエムヒルトが異教徒であるエッツェルとの結婚を拒む場面(1248 ; 1395)や、「鷹の夢」でウオテが、「神様が彼を加護してくださらなかったら、……」(14, 4)と語っている場面があるように、NLにおけるキリスト教の影響力、もしくは詩人や登場人物たちの(異教にしろキリスト教にしろ)神への信仰心の強弱については見逃せない点ではあるが、本稿ではその省察には立ち入っていない。

(19) グンテルとブリュンヒルトの初夜の場面では、騎士競技の時と同様、ジーフリトの力(助け)を得たグンテルがブリュンヒルトの処女を奪う。

(20) ヴェーバーは、ここでの「心の美しい(seelenschön)」状態を、「精神的な醜さとは対照的なもの、それ故に悪魔性(Dämonische[n])の解放に至っていない」状態であるとしているが、これはクリエムヒルトに対する「復讐鬼」としての否定的イメージが先行し過ぎている表現であるように思われる(Gottfried Weber : Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Stuttgart(J. B. Metzler)1963, S. 6)。

(21) 中高ドイツ語の ‚*liebe*' の第一義は「喜び」を意味していると考えられる。注7で挙げた辞典および文献を参照。

(22) 中高ドイツ語で「悲しみ」という語を精確に表現しているのは ‚*trûre*' であり、‚*leit*' の勝義は「苦しみ・痛み」であるが、クリエムヒルトの *leide*(17, 3)は「苦しみ」と「悲しみ」の両方の意味を含んでいると考えられる。また、‚*minne*' と ‚*nôt*' もしくは ‚*liebe*' と ‚*leit*' といった対立概念の関係性は、中世文学における詩人たちのミンネ構想に大きな影響を及ぼしているテーマであるが、本稿ではこのテーマについての省察は踏み込まず、あくまで「鷹の夢」における両者の関係性に限定して考察している。

(23) 注7で挙げた辞典および、Duden : Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 10 Bänden. Hrsg. vom Wissenschaftlichen Rat der Dudenredaktion. Mannheim 1999 を参照。

(24) 心(*herze*)は「人間の人格的中心」に位置するものであり、物語や歌謡において《生長[変化]するものとしての》心は頻繁に用いられている。その際、心はとかく宮廷的恋愛(*minne*)と親密に結びつけられる。そして、心とは思考(もしくは願望・志向)と感

情とを統率するものであり、「知性のような感情」を現実化する人間の内面的な力である(Vgl. Otfrid Ehrisman : a. a. O., S. 86-91 ; Joachim Ritter(Hg.) : Historisches Wörterbuch der Philosophie Bd. 3. Basel 1974, Sp. 1100-1112)。

(25) Gernot Müller : Symbolisches im Nibelungenlied. Heidelberg 1968, S. 66 u. 67.

(26) Maren Jönsson : a. a. O., S. 250.

(27) Marianne Wahl Armstrong : a. a. O., S. 252.

(28) Gottfried Weber : a. a. O., S. 10.

(29) ジーフリトがヴォルムスの宮廷に滞在している間のクリエムヒルトの態度(132, 2-4 ; 137, 1-3)、およびザクセン戦争後の祝宴での初めての対面での態度(224 ; 238, 4 ; 240, 4f. ; 293f.)は、彼女の気持ちが次第にジーフリトへと向かっていく様子を示している。その後、イースラントへの旅へ赴く場面の描写では、彼らの心はすでに互いに強く結ばれあっている様子が窺える(353, 1-2 ; 374f.)(拙稿『ニーベルンゲンの歌』論――クリームヒルトの愛をめぐる解釈の試み――(成蹊大学大学院文学研究科社会文化論専攻修士論文)2003 参照)。

(30) グレンツラーは、「クリエムヒルトの《主観性》は〈ミンネの激情(Minneaffekt)〉の発生に際しては取るに足らないものである」という見解を見せている。これは、クリエムヒルトがジーフリトへの恋に焦がれたのは、彼の「名誉」がヴォルムスの宮廷で実証されたことの反映であるというものであり、彼女はジーフリトの「美徳」を客観的に認識したに過ぎないというものである。そして、ジーフリトが「最強の人」であるが故に、「鷹の夢」に登場した敵対者である鷲に打ち勝つことができると思ったからこそ、クリエムヒルトは〈ミンネの激情〉に陥ったのである、としている(Thomas Grenzler : a. a. O., S. 173ff)。しかし、クリエムヒルトは「鷹の夢」において、鷲に打ち勝つことのできるような鷹を夢見てはいない。むしろ詩人は、ジーフリトはかの鷹であり、彼女が「愛した」男性であることをはっきりと語っている。だからこそ、彼を失う破目になったのであり、彼の喪失が彼女の心に大きな苦しみと悲しみをもたらしたのである。

(31) NL とミンネザングとの間に共通する表現を指摘する研究者は多く、ジーフリトのクリエムヒルトに対する恋慕の情(284 ; 285 ; 295)は、ミンネザングで用いられる叙情的な表現によって描かれており、ジーフリトの「愛」も心的営為に基づくものであると言える。

(たなか　かずよし／博士後期課程)